

令和 5 年度

高等学校推薦入学試験問題

国 語

受験上の注意

- ◎ 時間……………45分
- ◎ 解答はすべて、別紙解答欄に記入すること。
- ◎ 字数制限のある場合、句読点、カギなどの
記号も字数に入れるものとする。

第一問題 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

——なるほど……。

父が川名茂治に注1四逆散を用いる理由は、症状から見て筋が通っていると思った。数ある漢方処方の中から四逆散を的確に選
び出している。林太郎にはできない相談だった。

林太郎はあらためて父、静男の漢方の技量を再認識した。

静男は二十歳から注2津和野藩主・亀井家の御注3典医、森白仙はくせんの下で漢方を学んだ。弟子入り後、その実力と人柄が見込まれ、
婿として森家に迎えられたのだった。

その父が川名に四逆散を選択した。この処方では、いずれ川名の病状は改善されるだろうと林太郎は判断した。あとは、経過を見
るしかなかった。

ところが、川名茂治は、

「早く何とかしろ」

と口汚く父をののしっていた。さらに、やぶ医者呼ばわりもしていた。

林太郎には、あの人格を否定するような川名の言葉を、なぜ父が聞き流すのか理解できなかった。病人を刺激しないよう何でも
言わせておくという理由だけだろうか。政府の高官だから遠慮しているなど、注4世故せこに疎うとく①名利みやうりに走らない父の性格からして
あり得ない。それとも、母も知らないような厚い恩義を受けたことがあるのだろうか。

——何だろう……。

いくら考えても答えは導き出せなかった。

林太郎は立ち上がって、書架に注5『傷寒論文字攷』を戻した。

この日の午前、林太郎はいつものように橋井堂医院で、父や注6書生とともに診療をこなした。患者は途切れることなく訪れた。
林太郎も医院を手伝うようになって日々を過ごすうち、診察に慣れてきていた。この日も父を補佐して患者をさばいた。

診察室に立つ父、静男には一つの習慣があった。診察に疲れると、どんなに患者が待合室に溜ま^たっていても、休憩をとるのである。

「どれ、一服するか」

と小さい煙管^{きせる}を手にして刻み煙草^{たばこ}を吹かす。窓越しに自分で手入れした盆栽類をゆっくり眺めるのが楽しみの一つだった。園芸は静男の趣味である。

悠然と煙を吐き出す静男に、書生は気をもんで、

「注⁷ 大先生、患者さんが待っています」

と訴えるが、静男は意に介せず煙管をくゆらせた。

また、喫茶も静男の趣味だった。自室の小部屋に籠^こもってのんびり過ごす。故郷^{くに}にいるころ、注⁸ 石州流^{せきしゅう}の茶道に凝っていたのだが、東京に出るからはもっぱら煎茶^{せんちゃ}を嗜^{たしな}むようになった。

正午に近づくにつれて、林太郎もさすがに疲れが出てくる。昼食が待ち遠しく感じられる時間だった。

その昼食が居間に用意されていた。

林太郎が食事を始めていると、遅れてきた父は箸^{はし}を取るなり、

「いま、遣いが来て、これから注⁹ 郡医の会に出なければならなくなった。ついでには林太郎、すまないが、川名さんのところへ往診を頼む」

と早口に言った。

——えっ、あの川名茂治の代診に……。

一瞬、驚きと戸惑いが交錯した。

「具合を診^みて、当面の対策を講じてほしい」

父は早々に昼食を摂^とり終わると、

「頼む」

と言いついてあわただしく外出して行った。

食卓には好物の茄子なすの煮物が出されていたが、味もよく分からなかったのは、代診に気を取られていたからかもしれない。午後、出かける時間になって急に雨になった。

——雨か……。

林太郎は空を見上げて傘かさを広げた。溜め息をつきたい気分だった。藍染あいぞめの注10 作務衣さむえ姿に往診用の鞆かぼんを手にして、ぬかるみを避けながら注11 千住南せんじゅうに向かった。川名家は通りに面し、敷地の広い門構えの立派な家だった。

使用人に来意を告げると、夫人が出てきて、

「雨の中、お世話さまです」

と恐縮おそくの態で奥の寢室に案内した。

川名茂治は林太郎を注12 一瞥いちべつすると、疑わしそうな目を向け、

「やぶ医者はどうした」

と荒い声をあげた顔色はすぐれず、目の周りにも隈くまが残っていた。

その無礼な態度が腹立たしく、林太郎は、

「誰のことですか」

と故意に不機嫌に問い返した。

「誰？ おまえの父のことではないか。忘れたのか」

と川名は乱暴な口をきいた。

そのとき、林太郎は耳の奥に父の、

「ただでさえ苦しいのだから、仕方がない」

という声がきこえた。

② 林太郎は医者いしゃが患者かじやと同じ土俵どひょうに立ってほならないと思った。

——冷静にならねば……。

気を取り直して川名と向き合った。

「父は所用があつて今日は来られませんでした。わたしが代わりに診ます」

林太郎はゆっくりと言葉を吐き出した。

川名は黙って林太郎を見ていた。

「それでは診させていただきます。その後、具合はいかがですか」

とききながら川名の手を握ってみた。

——冷たい手だ……。

次に足を触^{さわ}ってみた。足も冷たかった。四肢の先端部の冷えが、身体^{からだ}の中心部に向かう状態にあるとき処方されるのが四逆散だった。父が四逆散を選択したのは適切だとあらためて実感した。

さらに、川名の寝間着をはだけて、腹部に手のひらを這^はわせて触診した。前回、林太郎は父ほど入念ではなかったが川名を診察している。今日の川名も左右の腹直筋^{かたはらよこきん}が緊張して二本の筋を作っていた。③だが、数日前ほどの硬さはなく、少し腹部が緩んでい^いた。四逆散が効果を上げている証のような気がした。

川名は診察を受けながら、終始、疑わしげな目を向けていた。

林太郎は時間をかけて診察を終えた。

「どうだ、やぶ医者^{いしや}の息子」

と川名はきいた。

「前より良くなっています。いまの薬でこのまま治療を続けましょう」

林太郎は自信を込めて言った。

それに対して、川名は意外の反応を示した。

「短期間に医者^{いしや}の腕^{うで}が上がることはあるのか」

ときいたのだった。

「さて、どうでしょう。どうしてですか」

林太郎は川名の真意が計りかねていた。

④「やぶ医者の子ながら、この前より丁寧に診ているし、腕が上がったような気がするのだ」

「そうですか」

と返事をしながら、この前は、父と一緒に往診で人任せにしていたのかもしれないと反省した。それにしても、今日の川名の態度は前回と違い、かなり穏やかになっている。

——何があったのだろうか。

父が処方した四逆散の効果としか思えなかった。四逆散で用いられる生薬の一つ、ダイダイの未熟果である枳実きじじは、健胃・便通作用のほかに、精神の安定を図り、注13鬱屈うらくくつした気分を解きほぐす作用が認められている。

「このまま治療を続けましょう」

林太郎はそう繰り返して部屋を出た。

「やぶ医者によく伝えておけ」

背後で、川名が叫んだ。

林太郎にとって気の重い往診だったが、川名の容態が改善の兆しを見せていたのは朗報だった。

帰りがけの玄関先で、夫人が、

「一時、親戚に連絡をとったほうがよいのではないかと思いました。少し良くなっているようですね。ところが主人はなぜか、今度の病気を死病と思込んでいます。八つ当たりもおさまりません」

と声を落として言った。

「さっき、ご主人の前で話しましたが、薬を替えて改善しています。死病などではありません。何をそんなに悲観しているのですしょう」

「それが分からないのです。でも良くなっているのですたら安心です」

夫人は気を取り直していた。

林太郎は夫人にあらためて服薬の指示を出して川名家を後にした。

雨はまだ降り続けていたが、家を出るときの鬱陶うつとうしい気分は少し晴れていた。

その夜、遅く帰宅した父に小部屋に呼ばれた。父が診察の合間に喫茶のために使う部屋である。

林太郎が部屋に入るなり、父は、

「川名さんはどうだった」

ときいた。一番の気がかりだったようだ。

林太郎は川名を診察し、みずから下した判断をそのまま伝えた。

「そうか……。林太郎もよく耐えたな」

父は感心したようだった。

「どういう意味ですか、父上」

「扱いにくい患者だが、よく我慢したと思う。短気を起こして診察も滞るか心配したものだ」

「それは……。それはありません」

林太郎にも医者としての心構えが少しはできていた。どんなに注14罵倒ばとうされても冷静だった父に学んだのだが、⑤それを口にす
るのは気恥ずかしかった。

「川名さんは快方に向かっているように思います。ところが、奥さんの話によれば、本人は死病だと悲観しています。その一方で、

⑥父上をあんなに罵倒していました」

何を考えているのか分かりません、と林太郎は感想を述べた。

「かなり、というか、ひどく悲観しているのは事実だ」

と父は言った。

「しかし、病状は改善しています。それなのに、あの人は父上に早く何とかしろと口汚く治療を急がせていたではありませんか」
「うむ、そこなのだが」

父は一呼吸置いて、続けた。

「人間、追い込まれると何をいい出すかしたのではない。最初は、早く治せとどなり散らしているのだ、とばかり思っていたが、違うのだ」

「えっ、どういうことです」

「早く楽に死なせてくれと要求しているのだ」

「まさか……」

「安楽死を求められても、応じるわけにはいかない」

林太郎は返す言葉が見つからなかった。

「川名さんは、元々、人に暴言を吐くような人物ではなかった。だが、いつしか早く楽に死なせてくれと要求するようになった。自暴自棄になったその原因が、どうしても分からなかった」

父は静かに口にした。

林太郎は、父が悪態をつかれても自制していた理由が、ようやく分かったような気がした。患者が急に悲観するようになった、その原因を探っていたのだ。

「川名さんが安楽死を訴える理由が、今日出席した郡医の会合でおおむね分かった」

父は地域の医師と話をするうち、川名と同様の症状をきたし、やがて痛みで

A

 転

B

 倒の末に死亡した患者の話をきいた。

「それが千住南に住む建具職人で、川名さんの幼馴染みだった。川名さんは自分と同じ症状で苦しむ様子を一部始終見ている、自分も ^{注15} 断末魔の挙句に命を閉じるものと悲観し、恐怖を感じたようだ」

「しかし、父上、川名さんはそれほどの痛みではありません」

「確かに。問題は、川名さんに出た目の隈だった」

と父は言った。

「A 転 B 倒した親友の建具職人も目の周りに黒い隈が出ていた。それを死の兆候だと思い込んでいたのだ」

「目の隈など単なる寝不足でもあらわれるではありませんか」

「まったくだ。だが、それは医者への認識だ。川名さんの気持ちではない。わたしは^⑦迂闊にも、それに今日まで気がつかなかった」

わたしの仕事は振り出しに戻った、と父は神妙だった。力不足を深く反省したようだ。

⑧ 林太郎は父の様子を見て、父はもう完成された医者だと思っていたが、父にとってはまだまだのようだ。暴言を吐く患者にも理解を深めようと謙虚に寄り添う姿勢は尊敬に値すると胸におさめた。

(山崎光夫著『鷗外青春診療録控』より)

注1 四逆散：漢方薬の名称。

注2 津和野藩：現在の島根県津和野町。

注3 典医：医薬を司る者。

注4 世故：世間の習慣。

注5 『傷寒論文字攷』：医学書『傷寒論』の研究書。

注6 書生：住み込みで学ぶ学生。

注7 大先生：静男のこと。

注8 石州流：武家茶道の流派。

注9 郡医の会：医師たちの会合。

注10 作務衣：仕事着。

注11 千住南：現在の東京都足立区。

注12 一瞥：ちらっと見ること。

注13 鬱屈：気が晴れず、ふさぎこむこと。

注14 罵倒：ひどくののしること。

注15 断末魔：死ぬ間際の苦痛。

問一 傍線部①・④・⑦の本文中における意味に最も近いものを、次のア～エからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

①名利に走らない

ア、保守的である

イ、評判を求めない

ウ、他人に尽くさない

エ、利他的である

④やぶ医者の子ながら

ア、やぶ医者の子のように

イ、やぶ医者の子であるから

ウ、やぶ医者の子だが

エ、やぶ医者の子以上に

⑦迂闊にも

ア、注意不足で

イ、あからさまにも

ウ、努力したのに

エ、遠回りしたが

問二 傍線部②「林太郎は医者が患者と同じ土俵に立ってほならないと思った」とあるが、林太郎がこのとき思った内容として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア、川名の言葉と同じような汚い言葉を用いることで、相手をおとしめて互角に対決していく必要があると思った。

イ、川名の言葉以上に荒い言葉を用いて川名を見下すことで、自分を川名よりも優位にする必要があると思った。

ウ、川名の言葉と同じ調子で反論せず、心理的な距離を保って感情的にならないように努める必要があると思った。

エ、川名の言葉で圧倒された状態を意図的に装い、自分が川名より下位にいることを誇示する必要があると思った。

問三 傍線部③「だが、数日前ほどの硬さはなく、少し腹部が緩んでいた」とあるが、林太郎はこのほかに、四逆散の効果が川名にどのように表れたと捉えたか。本文中の言葉を用いて、十字以内で簡潔に答えなさい。

問四 二重傍線部「この日」に川名の家に出発してから帰宅するまでに生じた林太郎の心情として適当なものを、次のア～カから三つ選び、記号で答えなさい。

ア、川名の手足に触れ、処方の適切さを実感する。

イ、鬱陶しかった川名に賞賛され、我を忘れる。

ウ、川名の手足の温度で治療の効果を確信する。

エ、川名の発言の意図が分からず、疑問を抱く。

オ、父の言葉を想起し、川名に覚えた怒りを抑える。

カ、患者をよそに休憩する父の依頼に憤りを覚える。

問五 傍線部⑤「それ」とあるが、どのようなことを指すか。最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア、医者的心構えができていたのに、実際は川名に罵倒されたこと。

イ、患者の言葉や態度に動じない姿勢を、父から学んだこと。

ウ、林太郎の診察により、川名が穏やかな態度に変化したこと。

エ、川名の病状を改善した父の力量に、賞賛の念を抱いたこと。

問六 傍線部⑥「父上をあんなに罵倒していました」とあるが、川名が静男を罵倒していた理由を、静男はどのように理解したか。六十字以内で具体的に説明しなさい。

問七 空欄 A・B にそれぞれ漢字を一字補い、文脈に合う四字熟語を完成させなさい。

問八 国語の授業で A さんのクラスでは、傍線部⑧「林太郎は父の様子を見て、父はもう完成された医者だと思っていたが、父にとってはまだまだのようだ」に関連して、教師の次の問いへの答えを生徒たちがそれぞれカードに記述した。生徒たちのカードのうち、本文に即した最も適当なものを、ア～オから選び、記号で答えなさい。

〔問い〕

「父静男の様子に尊敬の念を抱いた林太郎は、医師としての父の姿をどのように捉えなおしたのか。」

〔カード〕

ア、「若いときから訓練を積み、多様な方法で病態に対処できる鋭い観察力を備えた点に医者完成形を見出だしていた。けれども、患者の言葉を文字通りに解釈するのではなく、そこに隠された真意を患者の置かれた境遇と関連させて探り、患者の要求通りに応じるべきだったと悔いた姿に感動した。」

イ、「人格を否定するような言葉を浴びせられても、辛抱強く患者から逃げずに向き合おうとした点で完成された医者だと捉えていた。しかし、目の前の患者の様子のみならず、日進月歩する医学と薬学に関する知識や技術を、医師仲間と共有できていなかったと反省した姿に感激した。」

ウ、「どのような症状にどんな薬剤の処方があるかを熟知したうえで、患者の病態に最適な処方を選択できた点に
医師の完成形を見出だした。だが、そのことに満足せず、患者の精神状態が不安定になってしまう根本的な要因を、
患者の目線に立って把握する必要性を実感した姿に感心した。」

エ、「患者に真剣に向き合う時間を確保せずに疲れを癒やすことを信条とし、患者の動静に右往左往しない平常心を保っ
ている点で完成された医者だと捉えていた。だが、きちんと患者に病状や治療方針、薬についての情報を提供し、患
者の不安を取り除くべきだと悟った姿に感銘を受けた。」

オ、「患者がいかにひどい態度で接してきたとしても、病による苦痛のあまり生じた衝動的なものだと理解して診療し続
けていた点に医師の完成形を見出だしていた。けれども、目の隈が川名の病の症状の一つとして出現することを見落
としてしまい、そのことを恥じ入った姿に感嘆した。」

第二問題 次の【文章Ⅰ】は、熊代亨『健康的で清潔で、道徳的な秩序ある社会の不自由さについて』（二〇二〇年）の一部であり、【文章Ⅱ】は、石田光規『人それぞれ』（二〇二二年）の一部である。これらを読んで、後の問いに答えなさい。

【文章Ⅰ】

現代社会では、友人や恋人や知人を自由に選ぶことができる。とりわけ首都圏には人材が集まり、網の目のように交通機関が整備されているため、人間関係の選択肢はほとんど無限に近い。インターネットの普及によって出会いの選択肢はますます増え、男女関係も含め、インターネットを経由して誰かと知り合うことは今では珍しいことではない。

しかしこのようなハイレベルな自由が行きわたったことで、私たちは、①自己選択に基づいて友人や恋人や知人を選ばなければならなくなった。

人間関係が自由選択になったということは、人間関係が自己責任になったということでもある。人間関係の不首尾を「他人のせい」にできなくなった」と言い換えてもいいだろう。人間関係がイエや身分や共同体に束縛されていた昭和以前の社会であれば、人間関係の不首尾を宿命や生まれのせいにできた。自分を呪うのでなく、宿命や生まれを呪って良かった。

対照的に、現代社会には人間関係を宿命のように束縛するしがらみが乏しい。唯一、親子関係がそれに相当するとは言えるものの、NHK「中学生・高校生の生活と意識調査」を見ても、いまだきの親の大半は、子どもの自由選択を尊重しようとしている。このような意識の親元で育てられた子どもが、成人後の人間関係を親のせいにするのは難しい。たとえば人間関係に用いることのできるリソースが遺伝的負因や家庭環境によって左右されているとしても、である。

と同時に、私たちは友人や恋人や知人として選ばなければならなくなった。付き合う相手を自由に選べる以上、他人もまた付き合う相手を自由に選ぶ。たとえば自分が付き合いたいと思っても、相手も同じ気持ちかどうかはわからない。人間関係の自由とは、付き合いたくない相手とは付き合わない自由でもあるからだ。

A 大多数の東京の市民のような、②人間関係が自由選択であるという通念を共有している者同士は、無理矢理に相手を付き合わせるのとは良くないと自覚しているし、自分が誰とどれぐらい付き合えるか、おおよその③市場価値を自覚してもいる。

すっかり内面化されたこの通念は、たとえばストーカーに関する法整備が示しているように、ある程度は法律制度によって支持されている。そしてインターネット上では、SNSにおけるフォロワー数／フォロワー数といったかたちで人間関係の「市場価値」が数値化されるようになった。

人間関係が自由選択になり、市場的側面を深めている以上、そこからあぶれ、疎外される人々が現れるのは必然的なことだった。人間市場のなかでたくさん人間関係を獲得する人がいる一方で、まったく人間関係を持たずに孤立を余儀なくされる人もいる。孤立していなくても、自分の望む人間関係と現実とのギャップを感じる人は少なくない。

「人間関係の自由のもと、自由に人間関係をつくる」という通念は、子ども時代から親に教え込まれるだけでなく、テレビでもインターネットでも良いこととみなされ、注1喧伝けんでんされているから、これを通念として内面化しないで済ませられる人はきわめて少ない。だからこの通念は、現代人の権利であると同時に義務であり、道徳でさえある。

このような通念に基づいて行動し、人間関係にも恵まれれば、さしあたり幸せには違いあるまい。だがもし人間関係に恵まれず、孤立に至ってしまったら、注2社会関係資本を欠いてしまうだけでは済まず、④義務や道徳の不履行にも心を蝕むしばまれ、劣等感や罪悪感を抱え込む羽目になるだろう。

注1 喧伝けんでん：しきりに言いふらすこと。

注2 社会関係資本：人と人とのつながりを資本としてとらえた概念のこと。

【文章Ⅱ】

私たちは、「一人」になることもふくめ、どのようなつき合いをするか、あるていど選べるようになりました。では、かりに、皆さんがつき合う相手を選べるようになったとしたら、どのような人と関係を結ぶでしょうか。

B、自らにとってなんらかの面でプラスになる人とながりの輪をつくるでしょう。注3第三章では、人間関係が「コス

「パ」化している現状を説明しました。しかし、「コスパ」の論理は、自らにも跳ね返り、かえって自分の居場所を削る可能性がある、とも指摘しました。自身が相手にとつての「コスト」となってしまうかもしれないからです。

「コスパ」の論理は、自らの居場所を削るばかりでなく、もうひとつの重大かつ単純な事実を見えづらくしてしまいます。「人にはプラスの面もマイナスの面もある」というごく当たり前の事実です。

コストとパフォーマンスという二元的な発想でつき合いを振り分けようとする、ひとりの人には「コスト」（マイナス面）と「パフォーマンス」（プラス面）の両方が混在するという当たり前の事実を見落としてしまいます。というのも、「コスパ」の論理は、「身の回りの人間関係は、プラスの面をもつ人のみで最適化できる」という過度な理想をもとに成り立っているからです。

人間関係の最適化に固執すると、つき合いに異質な他者が入る余地はなくなってゆきます。なぜかという、異質な他者は「コスト」（マイナス面）として視界の外に追いやられてしまうからです。

へ 中略 へ

最適化はしたいけれど、それは難しそう。かといって関係から退くのも寂しそうだから避けたい。このような心境のもと、多くの人びとは、相互に過剰に気を遣いながら、関係が崩れないように均衡を保っています。

このようなつながりに異質な他者が入る余地は、なかなかありません。第二章では、関係の修復の機会がないゆえ、ケンカを避けている大学生の実情を伝えました。人びとは高い期待から外れないように、マイナスの（異質な）部分を必死に隠しているのです。

異質な他者を取り込むには、さまざまな研究者が指摘したように、相手との深い対話が必要です。しかし、^⑤ 個々人がつながりの最適化を望み、^{注4} 期待値を上げている状況では、とてもではないが、そういった深い対話はできないでしょう。

したがって、私たちが深い対話を取り戻すためには、最適化願望をいったん脇におき、つながりへの期待値を切り下げ、人はプラスの面もマイナスの面もあるというごく当たり前の事実^{注5}に立ち返る必要があります。

そもそも、人をもつマイナスの部分^{注6}をなくして、人間関係を最適化することなどできるのでしょうか。私はできるとは思いません。私は、期待どおりにいくこと、期待にそぐわないこともふくめてともにすごしてゆく、というのが人づきあいの基本であり本

質だと思っています。

このような社会は集団的で息苦しいように感じられます。しかし、必ずしもそうとは言い切れません。

期待にそぐわないことがあってもともにすごしてゆける社会は、「コスパ」の論理が徹底された場とは反対に、人を「コスト」として容易に切り捨てない社会と言ひ換えることもできるからです。つながる相手を選び最適化できると考える「人それぞれの社会」では、その発想があまりにも欠けています。

私たちは、長い年月をかけて、ようやく「一人」になる自由を手に入れました。「一人」になる自由を手に入れたことで、私たちは理不尽な要求や搾取さくしゅから逃れられるようになりました。それは確かに素晴らしいことで、否定するつもりはありません。

C、現在の社会状況をみると、私たちは「一人」になる自由をもてあましているように見えます。「一人」になる自由を得て、名目上でもつき合う相手を選べるようになった社会では、人づきあいに対する期待値が上がります。

それと同時に、^⑥異質な他者はつながりの不協和音として視線の外に追いやられてゆきます。今や、誰かとつき合うには、つき合うに足るだけの理由が求められるのです。

「一人」になる自由を得る前、私たちは、気の遠くなるほどの年月をかけて対面中心の社会を築いてきました。顔を合わせて集団で過ごしていけるというのは、霊長類学の知見にもあるように、人類の比類なき財産です。私は、現代社会を生きる人びとは、ほんの少しでも、その原点に立ち返るべきではないかと考えています。

具体的には、相手が自らにとってマイナスになるかプラスになるかにとらわれずに、目の前の他者と腰を据えてつき合うことを、もっと積極的に意識してもよいのではないかと考えています。人にプラスの面があるうと、マイナスの面があるうとつき合ってみる。そうすることで、人の弱さに思いをはせられるようになり、また、異質な人とも仲良くしないまでも、うまくやっつけたいけるすべを身につけられるようになります。

迷惑をかけないよう、あるいは、場の空気を乱さないよう自らを律することのできる人は、たしかに立派です。しかし、それと同時に、おたがいに迷惑をかけつつも、それを笑って受け容れられるつながりも同じくらい大事だと思えますし、私は、後者のほうに居心地のよさを感じます。

このようになつながらは、おたがいが相手のもつ異質さを受け容れることによって初めて得られるものです。私たちは豊かになつたからこそ、「一人」になるだけでなく、相手の前にあえてとどまり、「ただつき合う」ということをもっと意識したほうがよい。そこから得られる多様性もあるのではないかと私は考えています。

注3 第三章…本文は第六章に拠っており、第三章では、「人それぞれ」の社会の問題点について述べられている。後の本文にある第二章も同様である。

注4 期待値…期待の程度。

問一 【文章Ⅰ】空欄 、【文章Ⅱ】空欄 、 に当てはまる言葉として適当なものを、次のア～オからそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし、同じものを選んではならない。

ア、おそらく イ、または ウ、つまり エ、しかし オ、たとえば

問二 傍線部①「自己選択に基づいて友人や恋人や知人を選ばなければならなくなった」と筆者が述べる意図は何か。その説明として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア、自己選択は現代社会が共有する通念であり、昭和以前の社会とは大きく異なることを強調する意図。
- イ、自己選択は現代社会が共有する通念であり、共同体を維持するためには必要なことであるという意図。
- ウ、自己選択には自己責任がとれない、選べないことを境遇のせいにならなくなったことを強調する意図。
- エ、自己選択には自己責任がとれない、相手をよく見抜かなければ損をするということを伝える意図。

問三

傍線部②「人間関係が自由選択である」とあるが、首都圏におけるこのような自由さはどのような背景からもたらされたか。それを説明した次の文の空欄「i」「ii」「iii」に当てはまる言葉を、指定された字数で【文章I】からそれぞれ抜き出して答えなさい。

首都圏への「i（二字）」の集中、また、「ii（四字）」の発展、加えて、「iii（七字）」の普及に伴って出会いが多様化したという背景からもたらされた。

問四

傍線部③「市場価値」とあるが、筆者がこのような表現を用いるのは、現代社会にどのような現状があると考えているからか。最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア、人々がコミュニケーション能力の優劣を競うようになったという現状があるから。
- イ、人々がSNSのフォロワー数を売ったり買ったりしている現状があるから。
- ウ、人々が経済活動にしか生きる意味を見いだせなくなったという現状があるから。
- エ、人々が誰とどのくらい付き合えるかを数値化し共有している現状があるから。

問五

傍線部④「義務や道徳の不履行にも心を蝕まれ、劣等感や罪悪感を抱え込む羽目になる」とあるが、「人間関係に恵まれなかった人が、そのような感情を抱くのはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア、現代人にとって共同体のしきたりに反する人間関係の構築は許されないことだから。
- イ、現代人にとって自由に人間関係をつくるのは自明の道徳のように認識されているから。
- ウ、現代人にとって人間関係上の不首尾の理由は、常に共同体にあると考えられるから。
- エ、現代人にとって人間関係を築くことが、絶えず劣等感を抱かせる原因になるから。

問六 傍線部⑤「個々人がつながりの最適化を望み、期待値を上げている状況」における人々の行動の特徴として正しいものに

は○を、間違っただものには×を記入して答えなさい。

ア、他人に迷惑をかけないようにする。 イ、友人との対立を避けようとする。

ウ、嫌われても正論を言おうとする。 エ、相手の要望から外れないようにする。

オ、その場の空気を乱さないようにする。 カ、ありのままをさらけ出そうとする。

キ、異質な部分を必死に隠そうとする。

問七 傍線部⑥「異質な他者はつながりの不協和音として視線の外に追いやられてゆきます」について、後の問いに答えなさい。

(1) 「異質な他者」と同じ意味合いで使われている言葉を【文章Ⅰ】から七字で抜き出して答えなさい。

(2) 「異質な他者」を取り入れていくために私たちはどうすればよいか。【文章Ⅱ】の〈中略〉以降の文章の言葉を用いて五十文字以内で答えなさい。

問八 【文章Ⅰ】二重傍線部「人間関係を持たずに孤立を余儀なくされる人」について、【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】で述べられている

内容の特徴に関する説明として最も適当なものを、次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア、【文章Ⅰ】では、現代人が人間関係を自由に選択するようになった背景には、親が子の自由を尊重したり、自由であるべきと教え込んだりする現状があることを指摘している。【文章Ⅱ】では、過剰に場の空気を気にする若者を紹介し、その原因もやはり親子関係によって左右されることが述べられている。

イ、【文章Ⅰ】では、現代人が市場経済を中心に社会生活を営むあまり、コミュニケーション能力の低い人々を排除しようとする傾向があることを指摘している。【文章Ⅱ】では、同様に「コスパ」という言葉を用いて、人間関係の構築が市場経済中心の空虚なものになってしまったことが述べられている。

ウ、【文章Ⅰ】では、現代人がインターネットの普及に伴ってSNSに依存する人々が増えている現状に触れ、SNS依存の危険性について述べている。【文章Ⅱ】では、SNS依存を避けるためには、直接会ってコミュニケーションを増やすべきであるという具体的な解決策が述べられている。

エ、【文章Ⅰ】では、高度な自由を獲得した現代人は、たとえ集団から孤立したとしても自由に生きていくことができる
と述べ、その方法をいくつか紹介している。【文章Ⅱ】では、様々な価値観をもった人々がいる以上、人間関係を持
たない人々に対して、孤立という言葉を用いるべきではないと述べている。

オ、【文章Ⅰ】では、現代人が人間関係選択の自由を手にした代償として、豊かな人間関係を持つ者・持たざる者との幸
福度における格差について言及している。【文章Ⅱ】では、現代人は人間関係選択の自由をもてあましていると指摘
し、コミュニケーションのあり方について筆者の考えが述べられている。

第三問題 次の1～5の各文の傍線をつけたカタカナを漢字に直しなさい。

- 1、明日の会議では、会社のフチンに関わる重大事について話し合うらしい。
- 2、ダンス教室の生徒を対象にした、ささやかなブトウ会が開かれた。
- 3、この設備は、管理者のショウダクを得た上で利用しています。
- 4、暑い時期に食べ物を放っておくと、すぐにカビがハンシヨクします。
- 5、昨年のおおみそかに近所のお寺で、除夜のカネを鳴らした。

令和五年度 高等学校推薦入学試験問題 [国語]

解答欄

第一問題

問一	①	<table border="1"> <tr><td>問三</td></tr> <tr><td>問四</td></tr> <tr><td>問五</td></tr> <tr><td>問六</td></tr> <tr><td>問七</td></tr> <tr><td>問八</td></tr> </table>	問三	問四	問五	問六	問七	問八	<table border="1"> <tr><td>問一</td></tr> <tr><td>問二</td></tr> <tr><td>問三</td></tr> <tr><td>問四</td></tr> <tr><td>問五</td></tr> <tr><td>問六</td></tr> <tr><td>問七</td></tr> <tr><td>問八</td></tr> </table>	問一	問二	問三	問四	問五	問六	問七	問八
問三																	
問四																	
問五																	
問六																	
問七																	
問八																	
問一																	
問二																	
問三																	
問四																	
問五																	
問六																	
問七																	
問八																	
④	<table border="1"> <tr><td>50</td></tr> <tr><td>30</td></tr> <tr><td>10</td></tr> <tr><td>60</td></tr> <tr><td>40</td></tr> <tr><td>20</td></tr> </table>	50	30	10	60	40	20										
50																	
30																	
10																	
60																	
40																	
20																	
⑦	<table border="1"> <tr><td>10</td></tr> <tr><td>50</td></tr> <tr><td>30</td></tr> <tr><td>10</td></tr> <tr><td>60</td></tr> </table>	10	50	30	10	60											
10																	
50																	
30																	
10																	
60																	
問二	<table border="1"> <tr><td>10</td></tr> <tr><td>50</td></tr> <tr><td>30</td></tr> <tr><td>10</td></tr> </table>	10	50	30	10												
10																	
50																	
30																	
10																	
問三	<table border="1"> <tr><td>10</td></tr> <tr><td>50</td></tr> <tr><td>30</td></tr> </table>	10	50	30													
10																	
50																	
30																	
問四	<table border="1"> <tr><td>10</td></tr> <tr><td>50</td></tr> </table>	10	50														
10																	
50																	
問五	<table border="1"> <tr><td>10</td></tr> </table>	10															
10																	

第二問題

問一	A	<table border="1"> <tr><td>問三</td></tr> <tr><td>問四</td></tr> <tr><td>問五</td></tr> <tr><td>問六</td></tr> <tr><td>問七</td></tr> <tr><td>問八</td></tr> </table>	問三	問四	問五	問六	問七	問八
問三								
問四								
問五								
問六								
問七								
問八								
問二	問二							
問三	i							
問四	問四							
問五	問五							
問六	ア							
問七	(1)							
問八	問八							
	イ	<table border="1"> <tr><td>(2)</td></tr> <tr><td>50</td></tr> <tr><td>30</td></tr> <tr><td>10</td></tr> <tr><td>40</td></tr> <tr><td>20</td></tr> </table>	(2)	50	30	10	40	20
(2)								
50								
30								
10								
40								
20								
	ウ							
	エ							
	オ							
	カ							
	キ							
	ク							
	ケ							
	コ							
	カ							

第三問題

1	2
4	5
	3

受験番号	名前	得点	※
------	----	----	---

※印欄は記入しないこと

推国